

# C. S. ルイスが『キリスト教の精髓』で示した キリスト教信仰

岡田 理香

OKADA, Rika

## 目次

### 序

1. キリスト教の共通概念——この世で目指したもの
    - 1.1. 中立の立場
    - 1.2. 教派を超えて
  2. キリスト教を伝える
    - 2.1. 無神論者へ語る
    - 2.2. 一信徒として
  3. ルイスの説く道徳——「最大の罪」から「自己放棄」へ
    - 3.1. 最大の罪とは
    - 3.2. 自己を放棄すること
  4. ルイスが理想に
    - 4.1. 『キリスト教の精髓』と聖人化されるルイス
    - 4.2. 原稿料、講演料を受け取らなかったエピソード
- おわりに

### 序

C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898–1963) が『キリスト教の精髓 (Mere Christianity)』(1952) の原稿を手掛けることになった前年 1940 年、英国は第二次世界大戦の最中であつた。戦況は英国にとって過酷な状況で、ロンドンには常にドイツ軍からの爆撃を受け続けていた。その頃オックスフォードに在住であつたルイスは、友人ロバート・ハヴァード<sup>(1)</sup>

と共にラジオに耳を傾け、ヒトラーの演説を聴いていた。演説の後、ルイスはこう言ったとされている。

私は他の人たちより弱いかどうか分からないが、演説の間に多少は動揺しないわけにはいかない。私は教師や警察官として役に立たないだろう。偽りを述べていると分かっているが、あの男が断固として偽りを述べるだけで、ラジオを聴いている時はともかく納得してしまい<sup>(2)</sup>そうになる。

ヒトラーの演説にルイスは動揺を隠せなかった。この経験の後、ルイス自身がBBC (British Broadcasting Corporation 英国放送協会) より依頼を受け、自らがラジオ講演を行うことになった。本稿で取り上げる『キリスト教の精髓』は、そのBBCラジオ講演の原稿をまとめて出版されたものである。

『キリスト教の精髓』成立のいきさつは、1941年にルイスがBBCから一通の手紙を受け取ることから始まった。その手紙はBBC宗教放送部門の制作責任者J. W. ウェルチ (J. W. Welch) からのもので、すでに出版されていたルイスの著作『痛みの問題 (*The Problem of Pain*)』(1940)などを読んで励まされたという感謝と、BBCラジオにおける放送講演の依頼であった。

「一信徒の見るキリスト教信仰」といったような連続講演はどうでしょう。一般信徒の分かる言葉で、キリスト教教義を積極的に言い直す必要があると、私は<sup>(3)</sup>考えています。

その後一週間ほどして、今度はBBC宗教放送部門の副主任エリック・フェン (Eric Fenn) から依頼の手紙が届いた。

8月か9月の水曜日の晩に連続講演を引受けていただけますでしょ

うか。ご了承いただければ、講演内容について一緒に話し合い、マイクを使用してのリハーサル設定などのために、一ヶ月前に草稿をお送りいただければ幸いです。<sup>(4)</sup>

この依頼を受け、ルイスはキリスト教の講演を行うことになる。それは1941年8月6日から毎週水曜夜7時45分から8時まで放送されたBBC「放送講演」となった。この講演は初年度に反響を呼んで翌年も続けられ、1942年と1944年にも、一回15分の放送が合計29回行なわれた。聴衆者は毎回平均60万人であったとされている。<sup>(5)</sup>その内容はキリスト教の教義について分かりやすく説いた講話で、後にその原稿を出版したものをさらにまとめたものが『キリスト教の精髓』として1952年に出版された。その概要は、最初に無神論者に神の存在証明を行ない、次に「信じていない人」に何を信じるべきかを説いている。そして最後に「クリスチャン」としての理想の生き方を提示している。

『キリスト教の精髓』は、ルイスの著作の中でも『ナルニア国物語』に次いで有名なものとなり、世界中で翻訳本が出版された。この『キリスト教の精髓』によってルイスは、新たな注目を浴びることになった。この書を見ることで、ルイスの示したキリスト教信仰内容に加え、ルイスの信仰そのものをも見ることが可能と思われる。本稿においては、次の点について考察したい。第一にルイスがキリスト者たるものとして目指していたものである。それは教派を超越した「中庸」のキリスト教ということが一つ考えられる。第二に人々にどのようにキリスト教を提示したかということである。それはかつてのルイスの「無神論者」としての経験が役に立っているものである。第三にルイスの示す「理想のキリスト者」とはどのようなものかについて着目する。それはルイスの持つ概念「自己放棄」に言及することになるだろう。第四に、『キリスト教の精髓』が聖典化され、ルイス自身も聖人と見なされる傾向について注目したい。

これらのことから、『キリスト教の精髓』でルイスが示したものと、ルイス自身のキリスト教信仰について考察する。

## 1. キリスト教の共通概念——この世で目指したもの

### 1. 1. 中立の立場

ここでは、『キリスト教の精髓』の内容を見る準備として、ルイスがその序文で示したもののから、ルイスがいかに中庸の立場を取り、教派の枠に捕われないものを目指していたかに着目する。

『キリスト教の精髓』の序文には、ルイスの教派を超越したキリスト教を提示したいという願いが表われている。

ルイスはまず自分のことを「英国国教会（The Church of England）の一信徒で、ハイ・チャーチでもなければロー・チャーチでもない<sup>(6)</sup>」と述べている。これは驚くべき記述である。というのは、ルイスの所属する聖三位一体教会は儀式を重んじる点からハイ・チャーチとされているからである。ハイ・チャーチに属するルイスが、何故「どちらでもない」と断言したのだろうか。それはルイスの所属するオックスフォード大学のモードリン・カレッジがロー・チャーチだったからだろうか。では例えばルイスの勤務先が、ハイ・チャーチとして有名なカレッジだったら、「自分はハイ・チャーチである」と断言していたのであろうか。いや、おそらくルイスがどこの所属であっても、同じことを言ったであろう。ルイスは「中庸」のキリスト教を目指していたことに加え、ハイ・チャーチとロー・チャーチの両方、あるいは教会に属しない人々を意識し、聴衆と同じ目線に立って語るということを心掛けていたのである。

どちらの立場でもないという断りの裏には、ルイスの目的として、ラジオを聴く（または出版後の読者）全ての人に対し、キリスト教について知って欲しいということがあった。ルイスは序文でこう書いている。

クリスチャンになって以来ずっと考えていたことは、信仰を持たない隣人に対して自分ができる最善でおそらく唯一の奉仕が、全てのクリスチャンたちが共通<sup>(7)</sup>に持つ信仰について説明し、代弁することだろうということでした。

ルイスはこのように自らの目的を読者に対して明確にしている。これはルイスがあらゆる作品を執筆する際に、ルイスを突き動かしている強い動機といえる。このような意識から、ルイスは自分の立場を中立のものとし、「キリスト教」を示そうとしたのである。

## 1.2. 教派を超えて

一方、キリスト教の教派について、ルイスはここで取り上げる問題ではないとして、言及を避けている。それはルイスの本来の目的、キリスト教を伝えることから外れてしまうからである。教派間の対立については、ルイスが常日頃から心を痛めていたことである。そしてルイスは全キリスト教会が一致する必要があることを明らかにしたいとも考えていた。それについて序文でルイスはこう述べている。

仮に私がキリスト教会の再一致の促進に直接貢献しなかったとしても、おそらく再一致しなければならないか理由については、明瞭にすることができた<sup>(8)</sup>と思います。

キリスト教を伝えることと、キリスト教会の再一致、この二つが『キリスト教の精髓』を執筆した時にルイスを動かしていたものであった。これらを意識してルイスが行ったことは、『キリスト教の精髓』の原稿を、アングリカン教会、メソジスト教会、長老派教会、ローマ・カトリック教会の4人の人物に送り、意見を求めることであった。つまり各教派で一致する見解を提示することを目指したのである。その4人とは、アングリカン教会の人物はオックスフォード大学トリニティ・カレッジのチャプレンであったオースティン・ファラー (Austin Marsden Farrer, 1904–1968) であり、ローマ・カトリック教会の人物は、ルイスの教え子で後に英国南部ファーンバラなどの修道院長になるビード・グリフィス (Dom Bede Griffiths, 1906–1993) であった。また、メソジスト教会の人物は、英国空軍のチャプレンであったジョゼフ・ダウエル (Joseph

Dowell)、長老派教会の人物は、先述の BBC の依頼者エリック・フェンであった。<sup>(9)</sup> 4 人に原稿を送った後、彼らからの意見の詳細は不明だが、ルイスが序文で述べている限りでは、「メソジストの聖職者は、信仰について十分に語っていない、ローマ・カトリックの聖職者は罪の許しの説明に必要以上のスペースを割いている、と述べたものの、他の点については著者と 4 者は同意していると判明した<sup>(10)</sup>」とルイスが記述している。

ルイスが 4 教派の人間に一致した見解を求めたことで、ルイスの「超教派的」な側面があると強調されてしまうことが先行研究や読者などの間では見られることが多い。だが当時の BBC においては宗教スタッフとして、様々な教派の人々が常時置かれ、企画に当たっていた。<sup>(11)</sup> ルイスが四人の異なる教派の人々へ原稿を送ったことについても、BBC が多教派のスタッフを持っていた背景があったことを、付け加えておかなければならない。

こうしてルイスは中立の立場から人々にキリスト教について語るという目的と、教派の一致という願いをもとに、ラジオ放送に臨んだ。次節では『キリスト教の精髓』の内容に立ち入ることにする。

## 2. キリスト教を伝える

### 2. 1. 無神論者へ語る

本節では、『キリスト教の精髓』のほぼ前半にルイスが展開する話の流れを追う。それは無神論から神へ、そしてキリスト教へというものであるが、ルイスが経た考察過程を土台にしていることを見るものでもある。

ルイスは『キリスト教の精髓』の第一部で、まず無神論者に対し、神が存在することを示している。ルイスは「無神論というのは、単純すぎます<sup>(12)</sup>」と述べて反論する。ルイスの無神論者に対する反論は、ルイスがかつて 20 代の頃に自分を「無神論者」と見なしていた頃のことが反映されている。ルイス自身が当時考えていたことを念頭に置き、それに反論しているのである。そして、人間を超越した絶対的な存在があることを示している。<sup>(13)</sup>

人間の行ないの事実を超越して何かの実在があり、それは私たちが作ったものでなく、私たちに圧力をかけている真の法則です。[——略——] 何かは宇宙を動かしており、それが私に善を成すように促し、悪を行なえば自責の念と不快さを起こさせる何かの存在があるのです。<sup>(14)</sup>

ルイスはこのように絶対的存在を提示し、人間を超越した存在があることを示す。その話の運び方は、ルイスが無神論から「絶対的なものが存在する」という考えに辿り着いた経緯と同じ道すじである。さらにルイスは、その「絶対的なもの」が「神」であるということを提示する。

神はこの世界を創りました。空間と時間、熱いものと冷たいもの、全ての色彩と味、全ての動物と野菜、これらは神が頭で考え、創りだしたものです。<sup>(15)</sup>

このようにルイスは、この世にあるものを挙げると共に、徹底的に無神論を退け、「絶対的なもの」である「神」が存在することを、段階を追って話す。同時にルイスはキリスト教の独自性についても語る。これも、ルイスの経験がもととなっている。ルイスは少年期にキリスト教を「いくつもの宗教の中の一つに過ぎない」と認識していたが、その後キリスト教を「唯一のもの」として受け入れた。その思考過程を活かし、説明しているのである。ルイスはキリスト教を「人が想像もつかなかった宗教<sup>(16)</sup>」とし、キリストの受肉と贖罪を以下のように説明する。

敵に占領された地域、それがこの世界です。キリスト教とは、その世界に正統な王が上陸し、変装して上陸したといってもいいでしょう。私たちに對し、現在行なっている仕事を放棄し、偉大なキャンペーンに参加することを求めている話です。教会へ行くということは、友軍からの秘密の電波を聞くことです。[——略——] キリスト

は私たちのために殺され、その死が私たちの罪を洗い清め、キリストは死ぬことによって、死そのものを無効にしました。これが定式です、これがキリスト教信仰です、これが信ずることの内容です。<sup>(17)</sup>

ルイスはこれらのことを、自分の「回心」への体験を基にして語るが、それだけでなく、人々に対してキリスト教への道をも勧める。

ここで私たちは二者択一に直面しています。この人が自分で語った通りの人なのか、または気のふれた人、あるいはさらに悪者だったと考えるかどうかです。彼が気のふれた人や悪者でないことは明らかと思われます。従って結論として、どれほど奇妙で恐るべきことであり得ないことであっても、私はその人が神であったこと、今も神であることを認めざるを得ません。<sup>(18)</sup>

ルイスはキリスト教への道を促し、「神は私たちに自由意志で、神の側に参加する機会を与えようと欲しているのです」と述べる。<sup>(19)</sup>ここでルイスは、当初の執筆の動機となっている目的を果たそうとしている。ルイスは「キリスト教を伝える」という責務を果たしたいとのかねてからの希望を、BBC ラジオ講演という形で、初めて公に行ったのであった。ルイスはキリスト教を語る際に、各教派が共通して持つキリスト教信仰内容を述べるよう努力している。この点がまさに、『キリスト教の精髓』が世界で受け入れられ読まれる所以である。それは教派に共通するものを提示するという意識から、人々に理解しやすい言葉で述べ、キリスト教そのものをいわば可視化したのである。

## 2. 2. 一信徒として

ルイスが『キリスト教の精髓』のほぼ前半部分で試みたことは、無神論者や信じていない人を聴衆として想定し、神の存在することとキリスト教とは何を信じるることかについて示すことであった。それは教派に共

通する内容であり、神についてと、罪の贖いとキリストの働きについての説明であった。そして最後には人々にキリスト教を信じるように促している。このようにキリスト教を分かりやすく説明できたのは、一つにはルイスの体験、つまり無神論からの逸脱と有神論への到達、そしてキリスト教に至ったという、ルイスの経験に負うところが多い。公刊された際に省略された部分の原稿で、ルイスはこう書いている。

私がBBCから依頼されたのは、何よりも私が一信徒であって聖職者ではないということで、普通の人の観点を聖職者より多少は良く理解しているであろうと思われたからであります。第二の理由は、私が長い間にわたって無神論者であって、ごく最近になってキリスト教徒になったことが知られていたからです。BBCは私がいろいろな困難を理解すること、外部からはキリスト教はどのように見えるかを思い出すことができるのではないかと考えたからであります。<sup>(20)</sup>

過去のルイスの経験と、現在はキリスト者であることから、ルイスは『キリスト教の精髓』を語る適任だったといえる。また、ルイスの「中庸」で共通の信仰を提示したいという意識をも活かすことができたといえよう。

もう一つ、ルイスが立場を活かすことができたという点について、ルイスが神学者でなくむしろ「一信徒」であったという点が考えられる。

ルイスのいたオックスフォードは、英国でもキリスト教神学の中心とされており、ルイスの周りにも神学者が多数存在していた。現代ではルイスの先行研究者として名を連ねるアリスター・マクグラス (Alister Edgar McGrath, 1953-) もキリスト教書を手掛けて日本で翻訳、紹介されている。だが、そのような専門家たちがキリスト教の概要を信徒に分かりやすく語るにはある意味困難が生じる。というのもその専門性ゆえに、逆に分かりやすい言葉で説明することがかえって難しいからであり、神学の知識のない人々や労働階級の人々が興味を持つように説明することは

困難が生じる。さらに固有の立場も邪魔することがある。アングリカンの専門家ならアングリカンへ入信することを促し、他教派を非難することも考えられることである。

だがルイスは「一信徒」という固有の立場を逆に活かし、独自の方法で特色あるキリスト教の説明を可能にした。それを一つのアイデンティティと理解することもできる。この理由から、ルイスは『キリスト教の精髓』を語るにふさわしい人物であった。そして予想以上に多くの聴衆と反応を得ることを可能とさせた。そして『キリスト教の精髓』は後に世界中で必読書と呼ばれるようになるのである。<sup>(21)</sup>

ルイスは上流階級や中産階級の知識人だけでなく、労働者や当時兵役に就いていた人々にも分かりやすく、キリスト教を伝えることができた。『キリスト教の精髓』が理解しやすいとの評価を得ているのは、一つにはルイスが自分の経験を活かしたからであり、もう一つはルイスが「一信徒」という立場だったからである。世界大戦の中で心の拠り所を亡くした人々が大勢いるという状況の中で、ルイスは『キリスト教の精髓』の原稿を書いた。そこには教派のみならず階級をも超越し、やがては国をも超越して、神とキリストについての共通の信仰を、ルイスが示す言葉の力とアイデンティティを持っていたからである。

### 3. ルイスの説く道徳——「最大の罪」から「自己放棄」へ

#### 3. 1. 最大の罪とは

本節では『キリスト教の精髓』の後半部分に登場する、ルイスの示した「キリスト者の生き方」に着目する。

この書の後半でルイスが語ったことは、理想の生き方である。そこには、キリスト者たるものこうあるべきというルイスの理想が掲げられている。これはルイスだけでなく、聴衆、読者もがある意味理想とするような生き方である。その内容は順を追うと、道徳について述べ、最大の罪と、罪に対して自己を放棄して生きることについて述べる、という展開である。

ルイスはまず理想のキリスト者像を語るに当たり、道徳的に正しく生きることを示す。<sup>(22)</sup>基本的な徳目「慎み深いこと」「自制すること」「正しくあること」「毅然としていること」<sup>(23)</sup>を挙げ、そして道徳の基本的なことがらについて説明している。これらの説明は、「神に喜ばれるように生きる」というひと言に集約されるだろう。ルイスの説く理想のキリスト者の基本は、神との関係、人との関係において、より良い関係を持つことである。

これに反し、罪や人間の悪についてもルイスは注意を払っている。そして最悪の罪が、人の心にあるものとしている。

最悪の罪というものは精神的なものです。他人を悪におとしめたり、いばったり、恩を着せたり、甘やかしてだめにしたり、陰口をたたいたり、権力や嫌悪を楽しむことがそれです。<sup>(24)</sup>

これらの提示から、「最大の罪」について書かれているのも、この書の特徴である。ルイスは「最大の罪」を「自尊心または高慢」と限定する。

キリスト教の教師たちによれば、最も本質的な悪徳であり、最も悪いことが自尊心です。不貞、怒り、貪欲、泥酔、その他はこれに比較するなら、ノミの刺したようなものです。この自尊心によって悪魔になってしまうのです。自尊心が他の全ての悪徳を引き起こします。それは完全に神に反する心の状態なのです。<sup>(25)</sup>

その自尊心または高慢をルイスは厳しく非難する。この状態を「神を知らないという状態とする。さらに自尊心を「心のガン」<sup>(26)</sup>とさえ呼んでいる。だが果たして本当に高慢が「最大の罪」なのだろうか。

「最大の罪」について、ルイスとほぼ同時代に生き、英国の聖職者であったD. M. ロイドジョーンズ (David Martyn Lloyd-Jones, 1899-1981) は、最大の罪として別の罪を挙げている。ロイドジョーンズは神を信賴して

いるか否かに最も重点を置く。まずロイドジョーンズは、罪の全てはキリストの十字架によって「一度で決定的に除き去られた」と主張する。その前提の下に、最大の罪は「それを疑うこと、神の言葉を疑うことである」としている<sup>(27)</sup>。これはルイスの考える「最大の罪」とは全く異なる示唆である。

その一方で、アンドリュー・マーレー (Andrew Murray, 1828-1917) はルイスに近い考え方を示している。マーレーもまた高慢を「最大の罪」としている。だがマーレーは高慢について警告することよりも、謙遜であることを強調する。その上で「高ぶることすなわちこの謙遜を失うことは、すべての罪悪の根源である」と述べている<sup>(28)</sup>。

ルイスが自尊心または高慢を最大の罪として警告したのは、ルイスが最もそれに直面しやすい立場にあったからではないか。かつてケンブリッジ大学を卒業し、アングリカン教会に勤めた人物はこう述べている。

薬物や盗難などという悪魔の誘惑に自分は関心を持たない。だが自分が弱いのは自尊心への誘惑である。ケンブリッジ大学を卒業したとか、教会で職を得ているとか、そういうことを自慢させようとする悪魔の誘惑<sup>(29)</sup>には、いつも負けてしまいそうになり、戦いの必要を覚えている。

これに照らし合わせてルイスの立場を考えると、これに類似した状況にあったと考えられる。ルイスはオックスフォード大学を卒業して大学の教員となり、著作を出版して成功し、著名人となっていた。そのため、「高慢」という誘惑を常に感じ戦い続けていたと推測できる。そのような状況から、あらゆる罪の中でもルイスにとって、より身近であった「高慢」に重点を置いたといえる。

また、「高慢」という罪が生み出すものは、神を認めないということに直接つながるということをルイスは危惧している。ルイスは自尊心の高い人を、「常に人や物事を見下しており、当然のことながら、見下して

いる限り上にあるものは見えない<sup>(30)</sup>」と述べている。確かに「高慢」という罪の中にいる時、人は自分を神としてしまい、自分よりも上の存在を見ることができない。そのため真の神が見えなくなるとう現象が生じる。そのことをルイスは伝えたいのである。

「高慢」という罪が「最大の罪」と見なされたのは、神への離反行為と自己中心的な生き方を伴うからとルイスが考えたからである。ルイスはそのことに対し、人々に警告を放ったのである。

### 3.2. 自己を放棄すること

「高慢」への警告と共に、ルイスの述べる理想の生き方とは、最終的に自尊心を捨ててへりくだり、「無限の安息を感じるようになる」「神と人との関係<sup>(31)</sup>」を持つことであった。それは、「高慢」とは相反する生き方である。そのためには悪を放棄し、自分の全て、願望や心の患いなどをキリストに渡すことをルイスは勧める。

キリストはこう言います。「全てを私に明け渡しなさい。あなたの時間やお金や、仕事が欲しいのではない。あなた自身を求めているのです。[——略——] 全部渡しなさい。そうすれば、新しい自己を与えよう。実際、私自身を与えるのです。私の意志があなたの意志になるのです。[——略——] 私に委ねるなら、あなたを完全にしよう。あなたを私の手に明け渡した瞬間、あなたはそのための存在となる<sup>(32)</sup>」。

ここで述べられている「自己放棄」の概念は、『キリスト教の精髓』で繰り返し強調されている。それはルイスの理想の生き方である。ルイスはさらに、自己をキリストに委ねて初めて本当の自分になることができると主張する。

私たちの本当の自己は、私たちがキリストのうちにあることを待ち

望んでいます。キリストなしに、「自己である」ことは良いことではありません。キリストを拒否して自分に頼ろうとすればするほど、自分の遺伝、育ち、環境、自然の欲に支配されるようになります。<sup>(33)</sup>

ルイスは「自己放棄」と共に、キリストに委ねて生きることを示す。「キリストを求めてください。そうすればキリストを見つけ、キリストによって全ての物が加えられるでしょう」と、命令とも取れる大胆な言葉を重ねている。<sup>(34)</sup>

ルイスが勧める「自己放棄」とキリストに従うことについては、パウロの言葉をも想起させる。柳生直行はこれについて、パウロの「われキリストと共に十字架につけられたり、もはやわれ生くるにあらず、キリストわが内に在りて生くるなり」(ガラテヤ2章20節、原文ママ)をルイスが解説したものと述べている。<sup>(35)</sup>確かに柳生の指摘した通り、ルイスはこの言葉を意識して、理想の生き方の実践へと導いているのである。

では「自己放棄」してキリストを選んだ人はどういう人としてルイスは語っているのだろうか。ルイスは「(謙遜な人は)自分の謙遜さについて考えることなどない。というのも、自分のことを全く忘れているからである」、「キリストを見ることで精いっぱいだからである」と述べている。<sup>(36)</sup>このように自己を忙殺して善に勤しむことは、ルイスが実践しようとしていたことであった。ルイスの友人オーエン・バーフィールド (Owen Barfield, 1898–1997) はこう述べている。

私が見る限り事実だと思うが、彼(ルイス)は人生のある時から、自分へ関心を持つことを意識的に全く止めてしまった。[——略——]最初は意識的に行なっていたようだが、やがて努力せずともできるような、いわば生得の魂の習慣になったのではないかと思う。<sup>(37)</sup>

努力しなくても自己を放棄することができるようになった、このルイスの姿を柳生は「われわれの信仰生活の模範とすべきではないだろうか」<sup>(38)</sup>

と述べている。ルイスは「自己放棄」を語るだけでなく、実践にも移していた。そのルイスを突き動かしていたものは、キリストに倣う生き方であろう。それはルイスの理想の生き方であり、この世で目指していたものといえる。

これまで述べてきたように、ルイスは人々に共通するキリスト教信仰内容を提示した。だがルイスは先に原稿を送った四教派の全てと一致した信仰を持っていたのではない。ルイスはローマ・カトリックの秘蹟を否定することも、アングリカンの煉獄否定に反論することもできたであろう。だが敢えて各教派に共通するキリスト教基本事項を語るに留まった。その態度こそがルイス自身が自己を抑えた「自己放棄」の表われであり、キリスト者としての理想像なのである。

## 4. ルイスが理想像に

### 4. 1. 『キリスト教の精髓』と聖人化されるルイス

ルイスが『キリスト教の精髓』で述べてきたことを、前半ではキリスト教の説明から、最後にはキリスト者として「自己放棄」してキリストに委ねる生き方を勧めるに至ったことを見てきた。『キリスト教の精髓』は時を経てやがて一部では教会の説教で頻繁に用いられるようになった。それと同時に、このような理想的なキリスト像を提示したなら著者ルイス自身もそういった生き方をしているのだろうと受け止めた読者たちによって、ルイスが聖人扱いされる傾向が、一部で強くなっていった。1979年米国聖公会祈禱書の教会暦では、ルイスは護教家と紹介されており、米国聖公会の『聖なる者たち——聖徒の祝日 (Holy Women, Holy Men: Celebrating the Saints)』(2009)では、ルイスの亡くなった日11月22日を小祝日とし、聖書日課と特祷が定められている。ただの一信徒であり大学教員であった人物が、聖人化される要因は何であろうか。

それは第一に万人に受け入れられる講話をし、尚かつ文字化しているということである。ルイスは『キリスト教の精髓』をラジオ講演の原稿として埋没させず、それを出版に至らしめた。この現象は現代でも稀なこ

とといえる。メディアを通じてキリスト教について語ったり、あるいは教会などで説教したりしても、それを出版に至らせることは少ない。この文字化するという行為は、ルイスが幼少時から創作にいそしみ、その才能を開花させていたことから鑑みられる。

第二にその内容が普遍的なものであるということである。まず、四教派に原稿を見せ一致した信仰を説くことを目的としていたこと、加えて自分の属するハイ・チャーチだけでなくロー・チャーチの人々に、そして社会的にもあらゆる立場の人々にも分かりやすく説くことを考えていたというルイスの努力が、理由として挙げられる。そしてルイスの示したものは基本的に「キリストに倣う」ということであった。そのため「自己放棄」がルイスの重要な概念となる。これはキリストの生き方そのものを表わしたものであり、全キリスト者が目指すところでもある。そのため現代にも通じる普遍的な内容となったのである。

第三に著者本人の生き方そのものが語る内容と一致していることである。ルイスは先述のバーフィールドの述べたように、自分に関心を持たなくなったとされている。さらにルイスは様々なところで原稿料を受け取らないといういきさつがあった。以下でそれについて紹介する。

#### 4. 2. 原稿料、講演料を受け取らなかったエピソード

ルイスが聖人と見なされる傾向には、ルイスの生き方に見られるいくつかのエピソードも要因と考えられる。ルイスは『キリスト教の精髓』のラジオ放送と同じ頃に出版された『悪魔の手紙 (The Screwtape Letters)』(1942)の原稿料を受け取らず、未亡人と孤児に送るように出版社に頼<sup>(40)</sup>んでいた。また、『キリスト教の精髓』のもととなったBBC放送の講演料をも受け取ることを拒否していた。そしてその講演料を「以下の宛先に送金してください」とBBCに手紙を書き、このようなリストをつけている。

1. ウェップ夫人、グロスター、アレクサンダー通り 25 番
2. 未亡人基金
3. バートン夫人、バッキンガム、タイフォード、ウィア
4. 聖ヨハネ福音協会、宣教ハウス、オックスフォード、マーストン  
通り<sup>(41)</sup>

これらはルイスが提示した「自己放棄」を、関係者以外には知られずに実践したという行為だった。これ以外にもルイスは妻ジョイの死後に妻の継子を養育しており、自分の死後の彼らの養育のことについてさえ案じていた。これらの姿勢から、ルイスは自らの語る「自己放棄」を実践していたと捉えることができる。

万人に受け入れられる言葉でキリスト教について語り、それを文字化すること、そしてその内容が普遍的であること、さらに著者本人の生き方が語る内容と一致していると見なされること、これらの三点が聖人化される人物の要素であるならば、ルイスはそれを持っていたとされる。ルイスは『キリスト教の精髓』を語るにふさわしい人物であっただけでなく、後の世にもキリスト教を伝えるのに適した人物だったのである。

## おわりに

ルイスはキリスト教を伝えるという目的から、各教派の中庸の立場に立ち、彼が意識していた主な教派における共通のキリスト教理解を示した。それは無神論への反論から、神の存在、キリストについて、といった基本的な内容で、あらゆる地位の人々に分かり易い言葉で語られたものであった。それを提示できたのは、ルイスが全教派を超越した信仰を持っていたということではなく、キリスト教を伝える目的を第一としたために自己を抑え、いわば「自己放棄」を実践したからである。『キリスト教の精髓』で教派の共通点を示し、全ての人々の一致を促すことに徹した。そしてこの書によってルイスも聖人と見なされるようになった。

一方、ルイスのキリスト教信仰はここでどう位置づけることができる

だろうか。ルイスは自らを「ハイ・チャーチ」でも「ロー・チャーチ」でもない、と述べているが、自分の立場を一つの可能性としてこう述べている。

深教会（Deep Church）という名を提案したい。それでもし謙遜さを欠くというのであれば、バクスターの言った Mere Christian ではどうか。<sup>(43)</sup>

ルイスはこのように述べて、自分の立場を Mere Christian とした。ここでルイスが用いている Mere という言葉について、柳生は「混じり気のないもの」「純粋な」という意味で用いていると述べている。確かに、ルイスがバクスターを引用していたことを鑑みると、現代で用いられている「単純な」という意味よりも、バクスターの時代に用いられていた「純粋な」という意味で使われていると考える方が妥当といえよう。<sup>(45)</sup> この Mere がまさに『キリスト教の精髓』のタイトル Mere Christianity となるのである。

ルイスが『キリスト教の精髓』で示したことは、自らの信仰だけでなく「教派の一致」への貢献でもあった。また、ルイスの希望はそれのみに留まらない。ルイスはこうも書いている。

全宇宙はキリストのために創られ、全てはキリストにおいて一つになると、聖書に書かれています。<sup>(46)</sup>

ルイスがキリスト教を伝えたのは、教派を超え、最終的には宗教をも超えて人々が一致することを願って執筆したのである。さらに、ルイスにとっては執筆することそのものがキリスト教信仰の現われであり、宗教行為であった。ルイスは手紙にこう書いている。

私が執筆することについて、これは苦情ではなく信じてもらいたい

ために書きます。もし、私の執筆することが神を喜ばせるなら、神を褒めたたえます。もし神を喜ばせないのなら、やはり神を褒めたたえます。おそらくそれは、私がああ邪悪な「虚栄」という病に陥らないように、評判と技術の両者を失うことは私の魂にとって最も健全なこと<sup>(47)</sup>でしょう。

こうしてルイスは自らの執筆活動を、神の栄光を現わすための宗教行為とし、亡くなる年まで執筆を続けた。

同じ時代のヒトラーの演説とは対照的な内容で、ルイスは同じラジオを通じ、キリスト教を伝えた。キリスト教を伝えるという行為はルイスにとって生涯にわたる執筆活動となったが、ルイスは独自の経験を活かし、「自己放棄」を貫く理想の生き方を心がけていた。その著作とその生き方そのものは、ルイスの没後に、人々の理想とされるようになったのである。

## 注

- (1) Havard, Robert Emlyn, 1901–1985 ルイスの友人で、主治医でもあった。
- (2) ルイスがラジオを聴いたのは1940年7月。Hooper, Walter, C. S. Lewis: *A Companion & Guide*, London: HarperCollins, 2005, p. 267 (フーパー、ウォルター、『C. S. ルイス文学案内事典』(山形和美監訳)、彩流社、1998年、206頁、同書の引用は以下すべて私訳)。
- (3) 1941年2月7日の手紙。Hooper, *op. cit.*, p. 303、フーパー、前掲書、234頁。
- (4) 1941年2月14日の手紙。Ibid., p. 304、前掲書、235頁。
- (5) Ibid., p. 305.
- (6) Lewis, C. S., *Mere Christianity in Selected Books*, London: HarperCollins, 1999, p. 313。以下MCと表記する。

17世紀にアングリカンの中でも儀式を重視するなどカトリック主義を強調する人々が「ハイ・チャーチ(高教会派)」と呼ばれるようになり、

それに対して福音主義の立場を打ち出した人々を、18世紀には「ロー・チャーチ（低教会派）」と呼ぶようになったとされている。塚田理、『イングランドの宗教』、教文館、2006年、364頁。

- (7) MC, pp. 313–314.
- (8) *Ibid.*, p. 315.
- (9) Hooper, *op. cit.*, p. 307、フーパー、前掲書、235頁。
- (10) MC, p. 315.
- (11) Briggs, Asa, *The History of Broadcasting in the United Kingdom*, Vol. 3. The War of Words, Oxford: Oxford University Press, 1995, p. 565.
- (12) MC, p. 346.
- (13) ルイスの「キリスト教回心」への経緯については、自伝、*Surprised by Joy*, London: HarperCollins, 1999、伝記、McGrath, Alister E., *C. S. Lewis: A Life: Eccentric Genius, Reluctant Prophet*, Illinois: Tyndale House Publishers, 2013などを参考にした。
- (14) MC, pp. 333, 336.
- (15) *Ibid.*, p. 344.
- (16) *Ibid.*, p. 347.
- (17) *Ibid.*, pp. 349, 355.
- (18) *Ibid.*, p. 354.
- (19) *Ibid.*, p. 361.
- (20) Hooper, *op. cit.*, p. 306、フーパー、前掲書、236頁。
- (21) “Goodreads: Mere Christianity”, <[http://www.goodreads.com/book/show/11138.Mere\\_Christianity](http://www.goodreads.com/book/show/11138.Mere_Christianity)>, retrieved on Nov. 25, 2014.
- (22) 人と人との関係、各個人の内側、そして人と人を創った力との間の関係について述べている。MC, p. 368.
- (23) *Ibid.*, p. 369.
- (24) *Ibid.*, p. 398.
- (25) *Ibid.*, p. 398.
- (26) *Ibid.*, p. 400.
- (27) ロイドジョンズ、D. M.、『霊的スランプ——信仰の回復』（石黒則年訳）、聖書図書刊行会、1992年、118、128頁 [Lloyd-Jones, D. Martin, *Spiritual*

- Depression Its Causes and Cure*, London: Pickering & Inglis, 1965]。
- (28) マーレー、アンドリュー、『謙遜』(松代幸太郎訳)、いのちのことは社、1989年、10頁 [Murray, Andrew, *Humility*, New York: Anson D. F. Randolph & Co., 1895]。
- (29) 2004年オックスフォード聖エブス教会において教会伝道師による発言。
- (30) MC, pp. 399–400.
- (31) *Ibid.*, pp. 401–402.
- (32) *Ibid.*, pp. 447, 450.
- (33) *Ibid.*, p. 464.
- (34) *Ibid.*, p. 466.
- (35) 柳生直行、『お伽の国の神学』、新教出版社、1984年、136頁。
- (36) MC, pp. 402, 416.
- (37) Gibb, Jocelyn [ed.], *Light on C. S. Lewis*, New York: Harcourt, Brace & World, 1965, p. xvi.
- (38) 柳生、前掲書、129頁。
- (39) *Holy Women, Holy Men: Celebrating the Saints*, New York: Church Publishing, 2009, pp. 697–698.
- (40) ウォルター・フーパーの解説による (Lewis, C. S., *The Collected Letters of C. S. Lewis*, Vol. 2, Walter Hooper [ed.], New York: HarperCollins, 2004, p. 483)。
- (41) 1942年2月9日のBBC エリック・フェン宛の手紙。 *Ibid.*, p. 508.
- (42) フーパー、前掲書、iii頁(日本語版序文)。
- (43) 1952年2月の手紙。 Lewis, *The Collected Letters of C. S. Lewis*, Vol. 2, p. 164. リチャード・バクスター (Richard Baxter, 1615–1691) の *Church-History of the Government of Bishops and Their Councils Abbreviated* (London: John Kidgell, 1680) に記載されている「私はキリスト者である。 Meer (当時は Mere を Meer と綴った) Christian である。他に宗教は無い」と書いてあるものが原典 (“Lewismania: Mere Christianity”, <<http://www.lewisiana.nl/baxter/>>, retrieved on Sep. 30, 2014)。
- (44) 柳生、前掲書、110頁。
- (45) “Mere, *adj.*”, I. 1. a., *The Oxford English Dictionary*, Vol. 9, Oxford: Clar-

岡田 理香 「C. S. ルイスが『キリスト教の精髓』で示したキリスト教信仰」

endon Press, 1989<sup>2</sup>, p. 628.

(46) MC, p. 448.

(47) 1948年クリスマス Don Giovanni の手紙への返信。Lewis, *The Collected Letters of C. S. Lewis*, Vol. 2, p. 1038.

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 おかだ・りか)